

魯迅の近代日本認識⁽¹⁾

——自民族批判との結びつきをめぐって——

(福岡大学非常勤講師) 潘 世聖

I. はじめに

魯迅の近代日本認識あるいは日本観というテーマについての研究は、膨大な魯迅研究の中にあって、意外にも少ない。その原因はおそらく次の2点にあるのではないと思われる。まず、魯迅は明治日本で7年あまりの留学生生活を送ったが、有名な「藤野先生」(1926.12)という一文以外、自らの日本留学時代について、ほとんど書き残していない。彼は生涯にわたって、日本と様々な関わりを持ったが、日本に関する言説は全体的に見ては多くない。この意味で、「魯迅と日本」の課題を取り扱う際に直面する困難の一つとして、依拠できる一次資料の乏しさがあげられる。この点で、魯迅は非常に特別な存在である。同じ日本留学を経験した文学者の中にあって、弟の周作人は1906(明治39)年～1912(明治45)年、立教大学で古代ギリシア文学などを学んだ。氏は自らの日本留学生生活、日本の社会、文化体験などについて幅広い著述を残しており、20万字以上に達する。郭沫若は1914(大正3)年来日、一高予科、六高、九州帝国大学を経て、1923(大正12)年に帰国した。周作人に似ており、彼も数十万字にも達する長篇自伝の他、日本の歴史、社会、文化についても様々に書き残している。東京帝国大学出身の郁達夫は1913(大正2)～1922(大正11)年の10年間、日本に留学していた。彼は直接に「日本の文化生活」(原題「日本的文化生活」、『宇宙風』第25期、1936年9月)をタイトルとした文章さえ書いており、まさに魯迅と対照的であった。また、魯迅の日本留学時代は中日関係にとって最も悲劇的な時代であり、この時代に対して重苦しい思いを抱い

てきた人々は少なくない。しかし、その時代の経験者であった魯迅の日本観を見ると、近代日本を高く評価する基本的傾向がはっきりと伺える。このような事実の存在が、中国の研究者に終始魯迅の日本観に対して慎重な態度をとらせたと言える。

本稿においては、関係資料の網羅的収集とその再読解に基づき、魯迅の近代日本体験・理解・認識を整理し、彼の近代日本観の基本構造と傾向を考察する。

II. 仙台医専時代の「書簡」

日本留学中(1902年4月～1909年8月)に、魯迅が直接に書き残した資料の中には、彼の日本観が伺えるものはほとんどない。1902年4月、22歳の魯迅は東京に来て、弘文学院に入学し、すぐに緊張した勉学生活に入った。魯迅が最初中国から日本に来た時、日本に対してどんな感触や印象を持ったかは、興味深い問題ではあるが、すでに知るすべはない。1902年6月、日本に来てから2カ月たった頃、魯迅は中国にいる周作人に写真を送った。その写真の裏面には次のような題記がある。

会稽山下の平民、日出ずる国の遊子、弘文学院の制服、鈴木真一の撮影、二十余歳の青年、四月中旬の吉日、五千余里の郵便を走らせて、星杓仲弟の高覧に達せんとす(「写真に題して仲弟に贈る」、佐藤保訳)⁽²⁾。

ここからは、魯迅のはじめて新しい天地に接する際の青春の情熱や自信が感じられる。

東京の弘文学院に続いて、魯迅は仙台の医学専

門学校で学生生活を1年半送った。結局、様々な経過を経て、仙台を後にすると同時に、医学を捨てることを決意した。これらについては、帰国後12年目に、書かれた「藤野先生」のなかに詳しく語られている。このほか、7年間の留学中に書かれた手紙が唯一1通残されており、それを通じて、東京を離れ仙台に着いて間もない頃の学生生活の様子、孤独な心境などを知ることができ、非常に貴重な資料だと思われる。以下、手紙を抄録しておく。

拝啓 前に江戸から一通差し上げましたが、すでに察入れ下さったことと存じます。以後ひとり仙台に移ってもうまるひと月になります。自分の影法師とでは話にもならず、無聊をかこっておりましたところ、きのう思いもかけずに任克任君を通じて『黒奴顚天録』一部とそれに手抄の「釈人」一篇を送り下さり、よろこび勇んで日の傾くのも覚えずにやっと読み終わりました。ご厚意まったくお礼の申しようありません。小生仙台へ来てからは中国の主人公たちとはずいぶんはるかになったわけですが、恨むらくはなおも奇妙奇天烈なことどもが新聞でこの目に触れることであります。はるかに故国を思うにつけても、夜明けは遠く、前車たる黒人奴隷がかくなる有様であったことが悲しく、いよいよ嘆息をますのみです。素民はすでに渡日したそうですし、その他にも浙江の者が相当多く、そうたいして離れているわけでもないのに、ついに会う機会を得ません。ただ日本の同級生が少なからず訪れますが、ここのアリーア人とまったくつきあいたくはありません。いささかのなぐさめは、ただ旧友の筆のたよりのみです。ここ数日向こうの学生社会にもかなり入ってざっと推察してみましたが、その思想、行為は決してわが震旦の青年の上に出るものではないと敢えて断言しましょう。ただ社交が活潑な点で

は連中の方がうわ手です。楽観的に考えるならば、わが黄帝の魂はあるいは絶祠のために餓えるようなことにならずにすむでしょうか。

こちらはたいへん寒いですが。ひるには少し暖かくなりますが。風景はまあ佳い方ですが、下宿はまったくひどいものです。東桜館のようなのはさがそうたってありません。いわゆる旅館というのもとても小さなものです。いま居るところは月に八円しかかかりません。が、前は人の声がうるさく、後からは日が射します。毎日食べさせるものときたら決まって魚ばかりです。まもなく土樋町に越すつもりですが、そこもやはり楽土ではありません。ただ学校にはやや近いので、少しはあたふたしなくてもすむだろうというだけのことです。ものごとは比較してみなければそのよしあしはわからぬものです。今となつては、東桜館は烏托邦ですし、貴臨館でも極楽と言っていいでしょう。学校の勉強は大忙しで、毎日一息つくこともできません。七時に始まり午後二時になって終わるのですが、小生は朝寝坊ですからこれはまったく仇です。課目には、物理、化学、解剖、組織、独乙などがあり、みな猛烈な速さで目が回るようです。組織と解剖の二つの用語は、臘丁と独乙を併用し、毎日暗記せねばならず、頭がたちまち疲れます。幸い先生のことばはまだなんとか理解できますので、もしうまく卒業できたら人殺しの医者にはならずすむだろうとか思っています。人体解剖はもう一通り見ました。小生は自分でも堪え性のある方だと思っていましたが、実際に見るとやはり胸がむかむかして、その有様がずいぶんたっても目に焼きついてはなれません。しかし見終わってそのまま宿に帰るといつものようにたくさん食べられたので、なんとか意を強うしております。同校の待遇はまあよい方です。校内の扱いはよくもわるくもないといったところです。ただ学費を納めに行つ

たら、受け取らないのです。向こうが取らないのですから、こちらも遠慮しませんでした。晩にはたちまち時計に化けてわたしのふところに入りましたが、なかなかの得策でしょう。

仙台は長雨は続き、今ではもう晴れましたが、はるかに故郷を思うと、やはり長く寂寞たる思いが消えません。学校の勉強は暗記にうるさいばかりで、思索を要しません。いくら勉強しないうちに、頭がこちこちになってしまいます。四年たてばおそらくでくの坊みたいになってしまおうでしょうか。……（「蔣抑卮宛 1904年10月」，中島長文訳）

この手紙に語られている内容はかなり豊富なものと言えよう。魯迅の「日本観」という視点から考えれば、理性的な認識という形のものが多いとも言えるが、しかし、当時の魯迅の孤独な心境、学校からの優遇及び魯迅の日本人を回避しようとした気持ち、学校での勉学、下宿の食と住、当地の気候などは、魯迅研究だけでなく、他のことを知るにも資料的価値があると思われる。

Ⅲ. 明治日本の風土・雰囲気と魯迅

1906年春、仙台医学専門学校を退学し東京に戻ってから1909年夏の帰国までの2年半に、魯迅は学生を身分を保っていたが、実は学校に通わず、自分の思うとおりの文芸活動を行って、外国文学作品の翻訳をしたり、科学啓蒙や思想啓蒙の文章を書いたりしていた。そして、経済的な心配もない⁽³⁾、本当の「自由人」として、最も普通の日常的庶民的生活からさまざまな文化、文学、思想、哲学の思潮まで、日本の社会文化生活に身を投じ、幅広い体験や理解を得た。こうした2年半の東京滞在は魯迅の日本理解、即ち日本観の形成にとってたいへん重要な意味をもつと思われる。

仙台時代、魯迅は藤野先生から、「多くの感銘を受け、大きな励ましを与えられた」（「藤野先生」）

一方、勉学生活は非常に緊張したもので、かつ、外国人は全校で彼一人しかいない状況の中、彼の孤独はたいへんなものであったと想像できる。そして「藤野先生」に書かれているように、試験の成績のことで、大きな屈辱と刺激を受けることとなった。これについて、周作人も「魯迅は仙台医学学校で各種の刺激を受けた⁽⁴⁾」と証言している。つまり、ある意味で、魯迅の仙台時代における生活の上で精神的に孤独感や抑圧感があり、ストレスがたまっていた時期であった。これに対して、2度目の東京での生活は、仙台時代のような圧力あるいは「影」がなく、自由自在に自分の好きな文学に取り組み、個人生活の面でも、毎日弟周作人と共に起居し、一緒に外国の小説を翻訳したり雑誌を作ったりしていた。ある意味で、2度目の東京生活は解放的で充実した時期であった。当時の魯迅の日常生活ぶりについては、周作人がかなりの量の記録を残している。

彼は朝起きるのが非常に遅く、特に中越館に下宿した時期は、一番自由で、無拘束だった。大抵、十時過ぎに目を醒ましてから腹ばいのままで、先ず煙草を一、二本吸った。煙草はく敷島⁽⁵⁾とって、口付きだったから、二本が両切の一本分にしか相当しなかった。洗面後、朝食を抜いて、しばらく座って新聞に目を通してから昼食をとり、どんなにまずくても構わず、そそくさと食べてすませた⁽⁶⁾。

魯迅は周りの環境、雰囲気、日本的な日常生活に抵抗感がなく、なじみやすかったようである。今残っている写真から見ると、当時の魯迅は下宿で和机を使って、紺ガスリの着物を着て、そして鼻下に当時日本で流行していたドイツ式な髭⁽⁷⁾をたくわえており、一見日本人らしい姿であった。また周作人の回想を調べると、次のようなものが見い出せる。「魯迅は弘文学院と仙台医専在学中

は、勿論制服を着用していたが、その後の東京における生活は、すべて和服だけで押通した、「彼は平常はどこへ行く場合でも、帽子は烏打帽で、和服に袴という服装で」、「ぶらっと本屋をのぞいたり、夜店を素見したりする際には、よく下駄も履いて」、「彼の風采は日本の貧乏な学生に似ていた⁽⁸⁾」。また、他の場合においても、魯迅は積極的に日本の生活になれるよう努力し、その中に楽しみを感じていたことが語られている。

私が初めて東京に行った時、魯迅と一緒に住んでいた。われわれの東京での生活は完全に日本化したものであった。かなりの留学生は日本的な生活になれず、下宿に住んでいるのに、テーブルや椅子を使わなければならない。ベッドを買えないから押し入れで寝たり、熱いご飯でないと食べられなかったりしている人もいる。こうした人を我々は笑う。なぜか言うと、苦勞に耐えないなら、国を出ない方がいいからだ。しかも日本へ留学に来て、単に技術だけを少し学んで帰ったとしたら、結局うわべにしか止まらないだろう。生活上の体験をしないと、日本のことを深く知ることが出来ないだろうと、我々は思う。……我々の住んでいるのは、普通の下宿で、四畳半の一部屋で、本箱の他に、文机一台と座布団二枚しかなかった。学校に通う時、学生服を着るが、普段は和服と下駄ばかりで、雨が降る時、皮靴を履くことがあるが、後は足下駄を履くようになった。……いずれにしても、衣食住の各面で我々はすべて日本式な生活をして、まったく不便が感じず、なれたら逆に非常に楽しく思った⁽⁹⁾。

そうした楽しみの一つに、東京神田の古本屋を回ることがあった。脇村義太郎の『東西書肆街考』（岩波新書87）によると、1906年9月当時、神田一帯だけに合計104軒の本屋、古本屋があったとい

う。魯迅は、「私の場合、神田区一帯の古本屋をのぞいて回るのが」「楽しみ」「の一つでもあった」と述べ、当時の本屋の様子も面白く書いている。

日本は大地震のあと、ずいぶん様子が変わったことと思うが、当時はあの一帯には書店がひしめいており、夏の夕方には、敝衣破帽の学生がいつも群れがっていた。店の左右の壁と中央の大きな台の上はみな本で埋まっており、店の奥の方には、たいていやり手の番頭がひざまずいて座って、両眼を光らしている、私にはまるで蜘蛛の巣に音もなくうずくまり、網にかつてくる者の貧しい学費を待ちかまえている大蜘蛛のように見えた。だが私もやはり他の人と同じく、ひとまわり見ようと、ためらうことなく入って結局数冊買うこととなり、おかげで懐の相当軽くなる気分を味わうはめとなったものだ。（「小さなヨハネス・序文」、藤井省三訳）

周作人もいくつかの文章の中で非常に懐かしげにそうした「光景」を思い出している。

その頃、私たちには、まだ銀座を散歩する風習がなかった。夜になって暇があれば、大抵夜店と本屋を見るばかりであった。そのため、本郷三丁目大学前の通りと神田神保町の表通りが、強く記憶に残っている⁽¹⁰⁾。

他に、「東京の本屋」、「東京を懐ふ」（いずれも筑摩書房から出版された、昭和15年版『瓜豆集』に収めている）などがある。また、当時の留学生は大抵「東京の本屋」を好み、良い印象を持っていたようである。魯迅より3年下の後輩であった黄尊三という留学生は、留学日記の中で、東京の本屋に触れており、「日本の神田には書店が、軒を並べている。学生はここを臨時図書館と心得ていて、勝手に本を開いて見るが、店主もそれを咎

めだてしない。貧乏学生で本を買う錢のない者は、毎晩書店で抄閲（抜き書き）するものがある。新刊書は日に日に増加し、雑誌も100種あまりある。文化の進歩も窺うことが出来る¹¹⁾と、感嘆している。

さらに、一次資料として、1903年当時、東京で出版された、浙江省出身の留学生が主宰した月刊誌『浙江潮』には、「日本見聞録」という欄がある。そこには、留学生の手による日本の政治、教育、社会風物などについての見聞が載せられており、東京の本屋、出版事情について、次のような「東京雑事詩」という詩が掲載されている。

籤軸琳瑯遍要衝、新聞雑誌破鴻濛。劇憐母国
惇寵慣、野廟孤山読大中。

詩の後にこう説明してある。「東京だけで、書肆が約千余軒ある。夕方になると、本屋には客が満ちて、みんな本を抜いて見ている。新聞雑誌は、一日一、二百種類が出されている。こうすれば、民衆の頭が開かれて、国勢が強くなるはずだ」（『浙江潮』第2期、1903年3月）。ここからは、近代日本の文明開化の様子も伺える。

こうした日本留学の最後の2年半は、最初の東京弘文学院の2年間、そして仙台医専時代の1年半と様子が大きく異なる。弘文学院時代は、同じ中国人留学生たちの進取の気象の無さに不満を抱き、「よその土地へ行ってみたら、どうだろう」（「藤野先生」）と思いながら、結局寒くて遠い仙台に行ってしまった。また、仙台医学専門学校時代も孤独で、特にいわゆる「カンニング事件」と「幻灯事件」をきっかけに仙台を離れる時の心境は、相当抑圧的かつ陰鬱だったようである。こうした留学前半の3年半と異なり、留学後半の最後の2年半は魯迅にとって心なごむ時期であり、東京を離れ帰国したのは、苦しみから逃がれようとしてではなかった。魯迅自身は「母が暮らしに困

り、やむなく帰国」した（「自伝」）と述べているが、実際のところ、それは弟の周作人が日本人女性羽太信子と結婚することになり、その生活を支える必要が生じたことなど一家の経済上の問題が生じたため、7年間あまりの日本留学を打ち切って、郷里に職を求めるために帰国したわけである。

IV. 自民族批判と日本への視線

魯迅が自らの日本観をつづった文章を見ると、まとまった形で正面から日本を論じたものは一つもなく、また思想論、文化論あるいは国民性論の次元で論理的、学問的に日本あるいは日本人を論じたものもまったくない。魯迅は主に社会の現実、歴史の現実の展開過程にあらわれた民族の長所あるいは短所だけに関心や直感的な理解を抱いていた。特に社会批評や文明批評を行う際、中国の社会問題、中国人の悪い根性を批判しながら、その対照として日本のことを持ち出すのである。

これは魯迅に限らず、当時、日本留学経験のある文学者にある共通したものだと言える。日本の中国文学者岡崎俊夫は近代日本と緊密な関係を有していた文学者郁達夫を論じて、次のような見解を述べている。

あのころのにはほんについては、郁達夫ばかりでなく、日本に留学した中国人は、なかにはむしろ悪口もあるが、大抵はみなほめている。……中国留学生がこのように明るい面ばかり見たのは、いうまでもなく当時の中国と比べて見ていたからである。自分の国があまりひどいので、それより少しでもよいと、実際より以上によく見えるのである¹²⁾。

日本人の立場から見れば、そうかもしれない。しかし、魯迅はそれに加え、中国の積弊を克服するために外国からあらゆる良い面を見つけ学ばなければならぬという強い意識を一貫して持って

おり、かつ、主張していた。かつて日本のことを論じて、魯迅は次のように語っている。

たとえ、中国固有でないにしても、長所でさえあれば、我々は学ぶべきであろう。その師が我々の仇敵であろうとも、我々は師から学ぶべきであろう。（『子供の写真のこと』、今村与志雄訳）

そのため、魯迅は日本、日本人のいわゆる「短所」にほとんど触れようもせず、日本、日本人を大いにプラス的に捉えている。彼自身明確に次のように宣言している。「私も他国の弱点を突くという使命を負ってるなどとも思わぬから、そこに力をそそぐ必要もない。」（『象牙の塔を出て』後記、小谷一郎訳）さらに、中日関係の悪化による人々の感情的要素さえあまり考慮することなく、真実かつ率直に自分の思いを披瀝していた。例えば、1931年11月、すなわち「満州事件」の直後、魯迅はあえて読者に忠告している。

排日の声の最中であって、私はあえて断固として中国の青年に忠告を一つさしあげたい。それは、日本人は私たちがみならうだけの価値あるものをいっぱい持っている、ということである。（『集外集拾遺補編・＜日本研究＞の他』、釜屋修訳）

このような強い思いが魯迅の日本観の奥にはひそんでいるのである。彼は終始自らの立場と視点を変えることなく、自分の日本観を提示しているが、その要点は以下のようなものである。

（1）日本人の「まじめさ」について。従来の日本人及び外国人（中国人も含まれる）による日本論は日本人の国民性を把握する時、ほとんどみな「忠君愛国」や「勤勉」などの特徴を強調している。芳賀矢一の有名な『国民性十論』（富山房、

1907年12月）は、日本人の国民性の特質として10項目を挙げ、その1番目は「忠君愛国」になっており、文学者、評論家大町桂月は「日本国民の気質」（1908年、のち桂月全集刊行会『桂月全集・第8巻』、1922年12月）で敬神（祖先崇拜）・忠君・愛国が「我が国体の精華」とであると強調している。さらに、郁達夫は「軽生愛国、耐勞持久」（生を軽んじ国を愛する、労苦に耐え辛抱強い）を「日本人の国民性の中心的な支柱」として捉えているのである⁴³。

しかし、魯迅は自らの体験や理解に基づき、日本人と中国人を比較して、「まじめさ」というものこそが、日本人の最大の長所、中国人に最も欠けているものと繰り返し指摘している。魯迅と長く親しい関係を持っていた内山完造は、次のような証言をしている。

僕は今度三カ月寝てる間に十分考えたよ、支那四億の民衆は大きな病気に罹かって居る、ソシテ其病源は例の馬々虎々と云うことだネー、アノどうでもよいと云う不真面目な生活態度であると思う、とは云うても今日の不真面目な生活態度になる迄には同情すべき、また憤慨すべき道程のあったことは無論であるが、だからと云うて今日のアノ不真面目な生活態度を肯定することは出来ないよ、ソレから僕は日本八千万民衆の事を考えたよ、日本人の短所は僕は言わない、僕は日本人の長所を考えたよ、日本人の長所は何事によらず、一つの事に対して文字通りの生命がけでやるアノ真面目サであると思うネー、最近の傾向はやや相反すもののあることを僕は認めるが、然かしたとい今そうした傾向があるにしても今日を成し遂げた事実を否定することは出来ない。アノ真面目は認めなければならん。僕はコウした両国民衆の比較をして見た。支那は日本の全部を排斥してもよいが、アノ日本人の長所である真面目丈は断じて排斥し

てはならん、ドンナ事があってもアレ丈は学ばなければならん、と思う。(『魯迅の思い出』, 社会思想社, 1979年9月, 47頁)

これは魯迅の亡くなる数カ月前のことであった。激憤に至った魯迅は日本人の真面目と中国人の不真面目をまったく対照的なものとして、前者への賞賛と後者への批判の態度を鮮明に示している。一時、中国では内山完造の証言への不信感を洩らす人がいた。しかし、内山の証言に見られる魯迅のこうした見解は確かに魯迅の心よりの感触であり、理性的な認識でもある。典型的な例を2つ見てみよう。一つは、やはりいわゆる「満州事変」の直後のことである。魯迅は中国の文人たちがいつも事実を「芝居」にあてはめて解釈してしまうことを皮肉りながら、「日本人は仕事は仕事、芝居は芝居で、決して混同することはない」(「新たな女将」, 吉田富夫訳)と評している。もう一つは、1932年、第一次上海事件が起こって、中国全土で「抗日」の声が絶えず上がっている最中のことである。魯迅は北京の大学での講演において、多くの若い学生の前で、次のような議論を発している。

日本人がまじめすぎるのに、中国人がふまじめすぎるのです。中国のことがらは往々にして看板をかがげればそれで成功ということになります。日本人はそうではありません。彼らは中国のように芝居をやるだけ、というのとちがいます。日本人はバッジや訓練服があるのをみれば、必ず彼らをほんとうに抗日している人間だと思い込み、むろん強敵だとみなします。こんなふうにあまじい者がまじめな者とぶつかれば、どうしたってひどい目にあいます。(「今春の感想二つ——十一月二十二日、北京輔仁大学での講演」, 山田敬三訳)

魯迅から見ると、真面目と不真面目が一種の国民的性格として、国家民族の生存のような大きな面から日常生活の細かいところまで現れているのである。彼は、「外国人は我々のことを、我々自身が知っているよりも、いつももっとはつきり知っている。試みにごく手近な例を挙げれば、中国人自身が編んだ『北京指南』よりも、日本人の書いた『北京』のほうがやはり正確だ」(「ふっと思いつく・十一」, 相浦杲訳)と、中国人を非難するとともに、日本人を褒めている。魯迅の思考と論理の中で、中国人の「馬々虎々」、即ちごまかしなどの意味を含む人間的いい加減さはすでに国民の精神構造や行動様式までに浸透しており、一つの頑固な悪霊になってしまい、活気のない社会を生み出しており、中国の再生を嚴重に妨害している。逆に、日本人の真面目さは日本の進歩と発展を強く支えているのである。

筆者の知る限り、日本においても、中国においても、魯迅のように国民性として「真面目さ」を重要視するのは、あまりないと思われる。魯迅は抽象論的ではなく、非常に感性的に日本人のこういう特徴を捉え、彼の自分自身の体験や感受性に忠実する独自性が見えてくるだろう。

(2) 日本人の模倣に長ずる特性について。日本人が古来から外国の文明を積極的に取り入れ、自民族の文明をより高い段階へ転換させ発展させることに成功したことは、すでに広く認識されている。当然ながら、今日でも、日本人の言説の中にはこのようなものが随所に見られる。いわゆる「そのときの世界の中心だと思った国のほうに顔を向ける」、「それが自分たちになにか役に立つと思ったときには、すぐそれを取り入れるという発想は、知識人からそんなに知識のない人にまで一貫してある」、「相手のすぐれたものを取りこんで、それを力にして相手を追い払おうということ」である⁴⁴。近代中国においても日本は大抵そのように認識されていた。胡適は日本へ留学に行くある

青年宛ての手紙の中で、次のように忠告をしている。

我々は（日本の）家庭、習慣、社会的風俗、政治的体制、人情、人物からその良い面を学ぶべきです。

最も大事なものは、日本文化を軽視する心理を排することです。日本人は我々の一番研究すべき民族です。彼らは多くの、世界中の各民族にない長所を有しています。一、清潔を愛すること。二、美を愛する。三、死を怖がらないこと。ある女のために死んでもいいし、ある主義に殉死しても結構です。四、頭を下げて他人の良さを学んだり、懸命に他人を模倣したりすることができます¹⁵⁾。

一部の人はさらに日本人の「模倣」に、独自の「創造性」を見出した。知日派の周作人にはこうした言葉がある。「普段、日本文化に対して、我々は大抵一種の先入観があり、それを＜模倣的だ＞と言っている。西洋でも、＜日本文明は中国の娘だ＞という人がいる。こうした見方は理由があるかもしれないが、あまり正確でない。日本の文化は、おそらく＜創造的模倣＞と言ってよい¹⁶⁾」。郁達夫も近い見解を示している。「日本の文化は、独創性に欠けてはいるが、その模倣は創造的な意味を持っている。礼教は中国に倣い、政治・法律・軍事及び教育などはフランス・ドイツに取り、生産事業は欧米に学んでいる¹⁷⁾」という。

1924年から1925年にかけて、魯迅は厨川白村の文芸評論集『象牙の塔を出て』（福永書店、1920〈大正9〉年6月）を翻訳し、その「後記」の中で、以下のように述べている。

著者は彼の母国に独創的な文明がない、卓越した人物がいないと叱責しているが、それは正しい。彼らの文明はまず中国に倣い、それから

ヨーロッパに学んだ。人物では孔子、墨子がいなかったばかりか、僧侶でも玄奘にまさる者はいない。蘭学栄えた後は、リンネ、ニュートン、ダーウィンなどと肩を並べるような学者は生まれ出ていない。ただし、植物学、地震学、医学の面では、彼らはすでに相当の功績を挙げている。あるいは作者は「自惚れ病」を正さんがために、故意にこのことを抹殺したのかもしれない。それでも煎じ詰めていえば、やはり固有の文明と偉大な世界的人物はいないということなのである。両国の関係がたいへん悪いときには、我々の論者もよくこの点を突いて嘲笑し、人々の一次の気晴しとした。けれども、私はまさにこの点が、日本を今日あらしめた所以だと思っている。なぜなら、古いものが少なく、執着がさほどでなかったから、時勢が変われば脱皮も実にくく、いつ、いかなる時でも生存に適応し得たからである。幸福に恵まれて生き残った国のように、固有の古い文明を恃み、その結果、すべてを硬化させ、ついに滅亡への路を歩まねばならなかったのとは違うからである。中国でかりに不徹底的な改革がなされたとしても、命運はやっぱり日本のほうが長久だろうと、私は確信している。（『象牙の塔を出て』後記、『語絲』週刊第57期、1925年12月。小谷一郎訳）

魯迅は当時一部の中国人における「中華思想」を鋭く批判しており、日本が時勢の変化に敏感に対応し、外国の良いものを取り入れ、自国の発展を促そうとしたという特徴を非常に肯定的に受け止めている。「彼らの遣唐使がやや違っているのは、我々とかなり異なる趣味のものを選択した点である。だから、日本は多くの中国文明を取り入れたが、刑法には凌遲を採用せず、宮廷にも宦官を置かず、女たちはついに纏足をしなかった」（同前）と評している。文芸の面では、魯迅はよく日本の外国文芸紹介の速さと広さに感心し、自

分も日本語訳を通じて、ヨーロッパ及び日本のものを中国の人々に紹介していた。晩年、日本の友人への書簡の中で、「日貨販売の専門家だ」（「山本初枝宛，1934年12月13日」，原文日本語）と自称している。魯迅は直接に「創造的な模倣」という言い方をしていないが、日本が優れた外国文明を積極的に摂取し、うまく日本の発展に応用させたと理解するとともに、高く評価しているのである。

(3) この他、断片的ではあるが、魯迅はさまざまな面で日本に対する認識を示している。

晩年の、文学青年尤炳坤への手紙の中には、国民性の問題に触れ、「日本人の国民性は確かにすばらしい」（「尤炳坤宛」1936年3月4日）と、自らの感想を率直に述べている。

武士道についても、魯迅の見方にはかなり個性的なものが見られる。この点は、周作人と比べることによってよく分かる。1919年、周作人は武士道のことを論じ、武士の本質は「奴隷」に過ぎないと慨嘆している。

小説戯劇に描かれる武士の行為はいかに壮烈、華麗であったとしても、このような事実を隠せない。つまり、武士は命がけて働く奴隷にすぎない。彼らが主君や家名のために死ぬのは、今日から見れば、まったく意義がなく、ただ彼らが時代の犠牲になり、非常に悲しいと思わせるだけである¹⁶。

しかし、魯迅の場合、もっぱら武士道における「壮烈な」側面に注目しているようである。1921年、魯迅は菊池寛の小説を論じる際、次のように指摘している。

日本における武士道とは、その力がわが国の名教以上のものであり、……もっとも、彼ら昔の武士たちは、まず自分の命を軽くみているか

ら、人の命をも軽んじているのであって、自分は生を貪りながら人を殺すという手合いとは明らかに小々違っている（『三浦右衛門の最後』訳者附記，『新青年』第9巻第3号，1921年7月。小谷一郎訳）

こうした視点は、少なくとも他の中国人による日本論の中にはほとんど見られないものと言え、そこに魯迅の日本の良さを見つけようとする姿勢が見えてくる。

魯迅は日本に7年余り留学し、その後半は特に文芸に専念して、常に日本語に接する状況にあったので、かなり高い日本語力が養成されたと思われる。こうして魯迅は日本語を美しいものとして見るようになったが、次の文章からよく分かる。1922年、魯迅はロシア詩人、童話作家エロシェンコの日本語による童話劇『桃色の雲』を翻訳し、単行本の前記の中で2回日本語について触れている。「私が見るところ、日本語は中国語とくらべ、実にしっとりとしていると思う。しかも著者はこの美質と特徴をうまくとらえているので、私は伝達能力を失っていると思わざるをえず、……」（『桃色の雲』を訳すにあたって一言，藤井省三訳）と述べ、はっきり日本語の「しっとりとしている」ことを「美質と特徴」として捉えている。

V. 真の理解による友好の成立

魯迅の近代日本観に付随する重要な問題として、日中の文学者の関係を通じての日本人と中国人との間の真の相互理解という問題がある。

それは、主に魯迅と日本の「名人」との面会から生じてきた問題であった。周知のとおり、本世紀の20年代に入ってから、魯迅は次第に近代中国文壇の「盟主」的な文学者になり、特に1927年上海に移ってから、日本の「名人」たち、特に文学者たちから魯迅は熱い視線を投げられるようになった。当時の著名な文学者による上海の魯迅詣で

はその一現象であった。中国文学研究者の釜屋修の統計⁹⁴によると、魯迅が上海移住から亡くなるまで会った文学者を含む日本人は以下のとおりである。

1928年 塩谷節山（温）、辛島驍、金子光晴、国木田虎雄（独歩の息子）、宇留川、内山完造、長谷川如是閑、前田河広一郎、秋田義一、尾崎秀実。

1929年 前田河、秋田、金子、森三千代（金子夫人）、水野精一、倉石武四郎、今関天彭、塚本善隆、山上正義、沢村幸夫。

1930年 今関、室伏高信、林芙美子。

1931年 増田渉、宮崎龍介、柳原白蓮、水野勝邦。

1932年 高良とみ、林芙美子、山本初枝。

1933年 木村毅、秋田、西村真琴（西村晃の父）、井上紅梅。

1934年 今関、志賀廼家淡海、賀川豊彦、鈴木大拙、新居格、山室周平、堀越英之助。

1935年 目加田誠、小川環樹、岩波茂雄、野口米次郎、円谷弘、長与善郎。

1936年 円谷、堀尾純一、山本実彦、増井軽夫、今関、増田、鹿地亘・池田幸子、河野さくら（鹿地前夫人）、奥村博史（平塚雷鳥夫君、画家）、奥田杏花（医師）、横光利一、武者小路実篤。

彼らのほとんどは魯迅の日記に登場している。しかし、日本の文学者との交流の中で、魯迅は中日両国の文学者間の真の理解という問題を強く感じた。例えば、長与善郎、野口米次郎との面会、特に彼らの書いた印象記、会談記のようなものから、魯迅は彼らが自分と自分の文学をあまり理解してくれていないことを残念に思っているようである。そうした悩みは本来公開を前提しない、親しい知人への書簡の中によく現れており、例えば、親しい後輩である日本人学徒増田渉への書簡の中では、

日本の学者や文学者は大抵固定した考をもって支那に来る。支那に来るとその固定した考と衝突する処の事実と遭ふ事を恐れます。そーして回避します。だから来ても来なかったと同じ事です。ここに於いて一生出鱈目で終わります。（「増田渉宛、1932年1月16日」）

名人との面会もやめる方がよい。野口様の文章は僕の云ふた全体を書いていない、書いた部分も発表のためか、そのまま書いていない。長与様の文章ももう一層だ。（「増田渉宛、1936年2月3日」）

と、失望を洩らしている。また、晩年の魯迅と親しい関係を持った内山完造の『生ける支那の姿』（学芸書院、1935年）の「序」は魯迅の手によったものである。その中で、魯迅は当時の時代状況下における中日の相互理解に大きな懸念を示している。「自分の考えでは日本と支那との人々の間はきつと相互にはつきりと瞭解する日が来ると思ふ。」しかし「兎に角今は其時でないのである」（今村与志雄訳）。

こうしたことの原因について、日本人研究者は、「日本人対面者の意識の水面下にある固定観念や現状認識の先入主が、魯迅とその周辺に対する客観的認識や認識における構造を妨げている」、そして、「無意識のうちに精神的に優位に立つと誤解し、その誤解の上に、文化的には懐古趣味・古典趣味に流れた」こと、当時の日中における「対立的」な関係にも関わっていることを要因として、日本人面会者側の状況を分析している⁹⁵。これは首肯できる分析である。

一方、魯迅自身はとりわけそれぞれ所属する社会状況の異なりを大きな原因としてかさねて強調している。

僕は日本の作者と支那の作者との意思は当分

の内通ずることは難しいだろうと思ふ。先ず境遇と生活とは皆違います。(「増田洪宛, 1936年2月3日」)

私見によれば、わたしをもって外国の誰かに準えるのは困難なことでしょう。彼我の環境がまず異なるからです。(「肖軍宛, 1935年8月24日」)

これらの手紙では、魯迅がどれ程意識していたかはあまり明確でないが、彼は実に重要な問題を提起している。即ち、個人としての文学者及び彼の文学を理解する際、彼自身をとりまく社会状況、歴史文化伝統、民族的共通課題などをしっかり理解することが、まず不可欠な前提条件だということである。例えば、アメリカの研究者は、魯迅の文学を含む「中国文学は、アメリカの一般読者に受けいれられてこなかった。……主たる理由は政治ではなく、文化的なものにあったのではなかろうか。アメリカ人にとって、中国文学は、ヨーロッパや南アメリカ、ロシア文学と異なり、＜非西洋的＞なものとして映り、基本的に理解しがたく、自分達のユダヤ＝キリスト教的歴史とギリシア＝ローマ的伝統とは無関係なものと考えてきた²¹⁾」と、文学理解における社会文化・歴史伝統理解の重要性を語っている。同じ東洋民族として、日本はアメリカとまた違うと言えるが、中国に対する無理解はやはり魯迅への無理解に直結していると言わざるを得ない。日本の研究者にも「中国と日本という状況の違いがあり、作品創作の現場も違い、文学者としての資質も違う²²⁾」ことを認識することこそが、双方の文学を理解する際の前提だという認識がある。

魯迅は自らの体験から、中日の間には、個人としての真の相互理解のために、一つの乗り越えなければならない「壁」、相互の社会状況、文化伝統の認識の必要性という問題が存在するというこ

とを提起している。この点は、一般的に異なる国、民族の人々が互いに付き合う際には特に留意しなければならない問題だと思われる。

VI. おわりに

以上の考察によって、魯迅の日本観の基本的傾向、即ちプラス方向に近代日本を把握する特徴が明らかになった。そして個人的な感情の面でも、魯迅は日本に対してかなり好感を持っていたと言える。後者に関しては、例えば同じ海外留学の経験を有する漱石との比較が、非常に興味深いと思われる。

漱石はイギリスで、魯迅は日本で、ともにいわゆる後進国から来た留学生として使命感と重圧感に悩まされた点で、2人は共通している。漱石はロンドン留学という「場」において外から日本を眺め、様々な思いを抱き、さらに自ら「神経衰弱」を口にするほどの猛勉強によって、自らの「文学論」の構築に向かうという具体的な行動のうちに、西欧追従の「他人本位」から「自己本位」の立場への転換がおとずれたと、自ら語っている²³⁾。ところが、同時に2年間の留学生活を送るなかで、イギリスに対してたいへん不愉快な印象を持ったとも、語っている。「洋行中に英国人は馬鹿だと感じて帰って来た」(狩野亨吉宛 明治39年10月23日)。「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり」、「余は生涯英国の地に一步も吾足を踏み入るゝ事なかるべし」(『文学論』・序)という。一方、魯迅は日本での留学時代を常に懐かしさを持って思い起こしており、生涯にわたって良好な印象を保っている。彼は「送増田涉君帰国」の中で、次のような心境を表している。「私といえ、枝垂れ柳の枝を折って故国に帰る君を送ろうとするのだが、心は東に向かう汽船につき従い、過ぎし青年のころを思い出してしまう」(原詩:「欲折垂楊送帰客, 心随東棹憶華年」, 伊藤正文訳)。魯迅のこうした思いがまさに彼の日本観にもよく

投影していると感じられるのである。

〔注〕

- (1) 本稿の執筆にあたっては、直接引用の他、主に次の先行研究、丸山昇『魯迅——その文学と革命』（東洋文庫，平凡社，1965年7月），仙台における魯迅の記録を調べる会編『仙台における魯迅の記録』（平凡社，1978年2月），伊藤虎丸『魯迅と日本人——アジアの近代と「個」の思想』（朝日新聞社，1983年4月），山田敬三「魯迅，周作人の対日観と文学」（『未名』第15号，1997年3月）及び北岡正子『魯迅——日本という異文化のなかで』（関西大学出版部，2001年3月）を参考にさせていただき、直接あるいは間接に大切な示唆を受けていることをことわるとともに、著者の諸先生に感謝を申し上げる。
- (2) もともと周作人の『魯迅の故家』（松枝茂夫，今村与志雄訳，筑摩書房，昭和30年3月）に収められたものである。後に新しい『魯迅全集』（1981年）に収められた。日本語訳『魯迅全集』第10巻，600頁を参照。
- (3) 魯迅は1902年南洋官費留学生として来日した。1907年の時点で、清国の両江学務処の公文書に見える、日本派遣南洋官費留学生に対する官費支給の「豫算表」にこう記載している。「姓名 周樹人，学校 徳語学校，学費 四百元，摘要 私立学校」。詳しくは、『江寧学務雑誌・第一冊』25頁，丁未（1907）年。北岡正子『魯迅——日本という異文化のなかで』（関西大学出版部，2001年3月）を参照。
- (4) 周作人「留学の回想」（原題「留學的回憶」），『蕙堂雜文』，新民印書館，1945年1月，95頁。
- (5) 当時の日本での煙草事情を記しておく。日本では、江戸後期に喫煙の風習が日本人の生活に根を深くおろした。明治期に入ってから，煙草の普及がより加速された。1907（明治40）年に，

政府は日露戦争勃発にあたって増大する軍事費をまかなうため，煙草の生産・製造・販売のすべてを専売の制度のもとにおいた。それ以後，紙煙草が一般化し，刻み煙草の嗜好はほとんど消滅に近い状態になった。そして口付き煙草から両切煙草，さてはフィルター付き煙草へと変わるに伴い，喫煙風習も一変した。専売創設の1907年に，数種類の口付きと両切煙草が発売された。具体的には，以下の通りである。「敷島」（口付，20本入，定価8銭），「大和」（口付，20本入，定価7銭），「朝日」（口付，20本入，定価6銭），「山桜」（口付，20本入，定価5銭）など。『大日本百科辞典・第11巻』（小学館，昭和47年7月）を参照。

- (6) 前掲『魯迅の故家』265頁。
- (7) 明治末期には，ドイツ皇帝をまねたカイゼルひげが見られ，例えば明治文豪の森鷗外がその一人であった。魯迅の留学期の写真を見れば，確かにカイゼルひげを蓄えている。（『大日本百科事典・15巻』〈小学館，昭和47年7月〉123—124頁を参照。）
- (8) 前掲『魯迅の故家』267—268頁。
- (9) 前掲「留学の回想」94—95頁。
- (10) 前掲「留学の回想」96頁。
- (11) 黄尊三著・さねとうけいしゅう，佐藤三郎訳『清国人日本留学日記』，東方書店，1986年4月，96—97頁。
- (12) 岡崎俊夫「中国作家と日本——郁達夫について——」，『文学』（岩波書店）第21巻第9号，1953年9月。
- (13) 郁達夫「雪夜——自伝之一章」，『郁達夫文集・第4巻』（海外版），三聯書店香港分店・花城出版社連合編集出版，1982年11月，92—93頁。
- (14) 山本七平，大濱徹也『近代日本の虚像と実像』，同成社，1995年8月。36，37，44頁。
- (15) 『胡適年譜』（四川人民出版社，1989年12月，237頁）による。

- (16) 周作人「日本近三十年小説之発達——一九一八年四月十九日在北京大学文科研究所講演」,『芸術与生活』263頁,(香港)書城出版社。出版時期不明。
- (17) 前掲『郁達夫文集』第4巻。
- (18) 周作人「遊日本雜感」,前掲『芸術与生活』480頁。
- (19) 釜屋修「魯迅・モラエス・白鳥・野口——日中文学交流(一九三五)点描——」を参照。伊藤虎丸他編『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史』(汲古書院,1986年10月)所収。
- (20) 前掲釜屋修「魯迅・モラエス・白鳥・野口——日中文学交流(一九三五)点描——」を参照。
- (21) ジョン・コワリス(Jon Kowallis)著,宮尾正樹訳「米国の魯迅研究について」,『魯迅全集・月報』第17号,昭和61年4月。
- (22) 川上哲正「一つの比喩から」,『魯迅全集月報・第14号』3頁,学習研究社,昭和61年11月。
- (23) 『私の個人主義』(『輔仁会雑誌』大正4年3月号)と『文学論・序』(大倉書店,明治40年5月)を参照。

◆ 中国研究所メールアドレス変更のお知らせ ◆

このたび当中国研究所のメールアドレスが変更になりました。

これまでメールアドレスは1つでしたが,部署ごとに分かれることになりました。

皆様にはご迷惑をおかけいたしますが,アドレス帳のご変更等,ご協力のほどお願い申し上げます。

何かご不明な点等ございましたらご連絡ください。

社団法人中国研究所 事務局

【新しいアドレス】

*代表:c-chuken@tcn-catv.ne.jp

*総務:c-soumu@tcn-catv.ne.jp

*編集/年鑑関係:c-nenkan@tcn-catv.ne.jp

*編集/月報関係:c-mon@tcn-catv.ne.jp

*図書館・HP関係:c-lib@tcn-catv.ne.jp